
NORMALIZE

hayate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NORMALIZE

【Zコード】

Z5615Z

【作者名】

hayate

【あらすじ】

入学および在学条件　『天才』であること。このたった一つのルールを掲げる天樹学園。日本の未来を背負っているとも言われるこの学園に、一人の少年がスカウトされた。名を、高瀬一夜。彼は、何一つ才能のない人間だ。そんな一夜が、『特殊な天才』たちがひしめく『マイナ・クラス』特別校舎に所属した時から、物語は動き出しあげ始めた

プロローグ（前書き）

どうもこんにちわ、hayateと申します。

天才と凡才、そんなテーマのお話です。ただし、ガチで頭がいいとかわるいとか、音楽ができるとか絵が上手いとか、そういうのとはちょっと違います。あくまでアクションなのです。

一人でも読んでくれる人がいるような、そんな作品にしたいです。

プロローグ

天才。

凡才。

言葉にすれば、この程度。

だがそこには確かに、厳然たる差があつて、それは誰もが心の奥底ではわかっていること。

才能の有無、それだけの違い。

しかしその『それだけ』が、時に大きな差異を生み出す。あるいは、時代さえ変えてしまつほどに。

ならば。

もし、仮に。

その因子たる天才を集めることができたとしたら、何が起こる?

誰にもわからない。

わかるわけがない。

だけど。

世界を変えてきたのは、いつだって天才だ。

だったら、天才が一点に集結すれば。

そこにはきっと。

何かが起こる。

『彼』がそう考えたのが、今から五十年前の話。

* * *

高瀬 一夜は逃げていた。

それもおさらくは、この短くは無い十五年の人生で一番の必死さで。

「はつ、はつ、はつ……ツ！」

緊張からバタバタとやたらつねりくなる足音を自覚しながら、ひたすら走る。

まだ五月になつたばかりだとのに、その額からは玉の汗が見て取れ、適度に切りそろえられた黒髪も皮膚に張り付いている。

今朝、採寸以来初めて袖を通したブレザーの制服も、今は発汗を促進する効果しかない。

「はつ、はつ、はつ……ツ！」

そこは、とある学校の廊下だった。

ただし、一般的なそれとは、大分異なる。趣自体はそれほど変哲というわけではない。ただ、どういった事情からか、やたらと破損箇所が多くつた。

見えるだけでも、床（リノリウムだろうか？）に空いた直径十七センチほどの穴、中ほどが斜めに切られて面積が半分になつた窓ガラス、天井には焦げ痕までつた。

おかしい、どういうことだ、と一夜の胸中で疑念が渦巻く。

さつきまでいた西棟はこんなのではないでは確かになかった。開校から三十年が経っているとは思えないほど綺麗な造りをしていた。

だというのに、なんだこの有様は。いくら別棟とはいえ、なぜこれほどの違いがあるのか。

流れる景色のなかにこれらの惨状を確認して、一夜は思つ。

(くそつー！ こんなとこへ来るんじゃなかつたー！)

微妙に涙目になりながらも、廊下の端まで走りきり、即座に体の方向を変える。

案の定そこには一階から一階に上がるための階段があり、一夜は一も二もなく、その最初の段に足をかける。

その時だった。

「待てコラあ！ 吹き飛ばすわよ覗き野郎！」

突如、不当な呼び名と不穏な命令が耳朵を叩き、少年は慌てて振り返る。

マズイ。この声は確か、そう。いちのせはづか一ノ瀬初花やくもとかいう女の声だ。

確か、八雲やくもから聞いた話では、この『才能』ギフトは

「 つと、そんなこと考へてる場合じやない！ とにかく逃げないと

回想を途中で打ち切り、逃走を再開するために体の向きを戻す。と同時に、一つ息を吐いた。

焦りはいまだ消えていなかつたが、それでも今の声で少々余裕が持てた。おおよその予測ではあるが、声量からしてまだ自分とはもうすこし距離があるはずだ。追いかけてくるコースが自分のそれをなぞつている以上、そういう簡単に追いつかれることはないだろう

という一夜の『甘い』考へは、まったくの予想外、もしくはある意味予想通りに、簡単に打ち破られる。

「吹き飛べッ！」

先ほどの句詞の後半と同意義の怒号、しかし明らかに違いがあつた。

吹き飛ばすわよ、と、吹き飛べ。

その差異に込められた意味をわずかに思考した瞬間、

ドンッッッ！ と、一夜の背後で爆発が起つた。

「な、あ
ツ！？」

のみならず、当然のようにそれに追随する形で、とんでもない爆音が鼓膜を、衝撃が肢体を襲う。駆け上がろうと足に力を込めていたことも手伝って、一夜は一気に階段を上りきった。

が、勢い余つて踊り場にたどり着いたと同時、思いつきり足がもつれ、勢いそのままに壁に激突した。

「…!？」

声にならない叫びを上げながら、一夜はりりりりと床の上を転がりながら悶える。

はたから見たら相當に間抜けな行為に間違いないが、幸か不幸か
踊り場にも一階に至る階段にも誰もいなかつた。

「ああもう！ なんだつてんだよ畜生！」

がばつ、と床に両手をついて上半身を起り、一夜は叫びを上げ

る。

上げてから、何が起きたのかを考える。

とはいっても、既におおかたの見当はついていた。ただし、非常に認めたくない答えだったが。

状況が、解答を如実に表している。

辺りに立ち込める黒煙。

鼻につく火薬の臭い。

そして、一階廊下の端の床、つまり先ほどまで自分がいた場所のすぐ後ろ、そこにはつきりと残った焦げ痕。

ここから導き出せる解答は

それを心中で呟くよりも早く、

彼女が姿を現す。

「 つたく。ずいぶんとまあ逃げたじやない、変態覗き野郎。ア タシから逃げられると本気で思ったわけ？」

なんのためらいもなく、彼女は上履きで焦げ痕の上に立つ。煙る視界の中で、破壊の爪痕をステージにして、

彼女が立っている。

傲然と。

自然に。

まるでこれこそが自分の舞台だと言わんばかりに、彼女は屹立していた。

一夜が、呟く。

「 一ノ瀬、初花……」

その言葉が、聞こえていたのかいなかつたのか。
判然とはしなかつたが、しかし彼女は答えた。

「あなたがどこのクラスだらうと、どうだつていいわ。だけど、後悔しなさい。この一ノ瀬初花に『^{バミング・ピューティ}爆撃の姫』にケンカを売った

「ことをね」

この学園に数多存在する、『^{ジーニアス}天才児』の一人として。

第一話 始まつを告げる男（前書き）

いつも、読んでこの方が多いからしゃったが、じんにちわに a yat e です。

この第一話は、ある意味まだプロローグのようなものです。派手ともまったくありません。本格的な始動は次からです。

そんなこんなで、今回もよろしくお願ひします。

第一話 始まりを告げる男

これも運命だと思えば少しばら楽になるだらうか、と少年は考えた。あるいは、夢でもいい。

とういうより、夢であつてくれ。

そんな現実逃避の願望を胸に、左手で自分の頬をつまみ引っ張つてみる。

痛い。

そして、それだけ。

「……だよな」

諦めたように咳く少年の耳には、現在進行形で歎声が聞こえてくる。むしろ、歎声しか聞こえてこない、と言つべきか。

その事実に思い至り、少年は周囲を見渡す。

とある公立高校の校門をくぐつてすぐに設置された、やたらに数字の羅列が書き連ねられた立て板。そしてその前にわらわらと集まる自分も含めた集団。

彼らは種々様々な、という前置きはつくものの、皆一様に制服を着込んでいた。詰襟、セーラー、ブレザー……無論自分も、三年間通い通した中学校の詰襟を着込んでいる。

そして、もう一つ。

田に入る全員が、まるで少年に見せ付けるように（被害妄想だといつ自覚はある）、笑い、あるいは泣き、しかし心から幸せそうに大騒ぎしていた。

なんのことはない、実に典型的な合格発表の模様だった。

ただし。

「はは……俺以外、全員受かってやんの」

もはや乾いた笑いしか出ない。

自分がだけがあの輪に入つていけない。なぜなら、自分は不合格だつたから。

受験番号なら、十回は確認した。それだけでは飽き足らず、一から順番に見ていき、何かの手違いで自分の番号が紛れ込んでないかも探した。ドッキリではないかと、プラカードを持ったスタッフがないかも探した。

結果わかつたのは、どういう冗談か、自分以外の学生が一人残らず合格していたという、ふざけるなと叫びたくなるような現実だけだつた。

「…………」

もう一度、頬をつねつてみる。

痛い。

やはり、それだけ。

「はあ」

そもそもなぜ自分は落ちたのだろう、と少年は考察してみる。

ボーダーと呼ばれる、目安となる成績くらいは取れていた。過去の合格者たちを見ても、少年の出来ならば通つても不思議はない、どころか順当に行けば通るはずだつた。

事実、少年の担任も「これならば問題ないだろう」と太鼓判を押してくれた。その全てを鵜呑みにしたわけではないが、実績のある教師だつたこともあって、自分の人生における重要な選択を決定したのだ。

当然のことながら、内申も抜かりない。特別な役職（生徒会関連

など）に就いたり、無遅刻無欠席とまではいかないが、ある程度模範生と呼べるレベルではあった。

やはり、何を振り返っても、落ち度は見当たらない。でも、落ちた。

それが、それだけが、結果。

何時間この場で考へても、この現実は変わらない。

「……帰る」

首をすくめて、心持ち目線を下げて、少年は踵を返す。三月の風は、まだ寒い。

防寒着を身につけなかつたことを悔やみながら、少年は歩き始める。

そして、その足が校門に差し掛かったところで、一度振り向く。誰も彼もが幸せそうにしているのを見たとして、

「……」

何も言わずに、少年は 高瀬一夜は家路についた。

これが、一ヶ月半前の話。

* * *

一夜が公立高校の受験に失敗した日から、すでに一週間の時が過ぎ去っていた。

もちろんその間、何もなかつたわけではない。

担任からの慰問ついでの私立紹介を受けて、見当の末にその私立高校に通うことはすでに決定していた。あつさりと決まったことからもわかるとおり、ここいらでは滑り止め専用とまで言われるほどの学校ではあつたが。

そんな事情があるとはいえ、なにはともあれ、ひとまずは高校に進学できることになったわけである。

既に受験失敗という精神的な傷もある程度癒えていたこともあって、一夜は心機一転これから未来に思いを馳せていた。

そんな折だった。

ハ雲断^{やくもたち}が、高瀬家のインター ホンを押したのは。

インター ホンでの呼び出しに応じたのは、一夜だった。

常ならばそういう雑事は母親である高瀬^{たかせ}静^{しづ}に任せているのだが、あいにく今は買い物に出かけていていない。

ついでに言えば父親は仕事中、中学生の妹にいたつては春休みを利用して友達と旅行に行っている。

必然的に対応できるのは一夜一人になるわけだ。

「えつと…… びつべ」

「これははどうも」「寧^{ひる}に。 いただきます」

初め、一夜はこの来訪者を家に上げる気はなかつた。

しかし、ハ雲と名乗ったこの男が玄関前で語つた内容、そして持参してきた一冊の資料が、一夜に現在の状況を作らせた。すなわち、ハ雲を招き入れるという状況を。

「いやーおいしいですねえ。これ、ビニカの銘茶だつたりします?」

「別に、そんなことはないんですけど……」

高瀬家のリビング。

ダイニングテーブルとは別の、足の低いテーブルを挟んだ一脚のソファ。そのうちの一つに、背もたれに寄りかかる、などとはせず、背筋を伸ばし、八雲は一夜に差し出されたお茶（無論、銘茶でもなんでもない安物）を飲んでいた。

その反対、もう一脚のソファに腰を下ろした一夜は、ぼんやりとそんなハ雲を眺めていた。

（この人が、あの『天樹学園』のスカウトマン、か……見えないな）

一見して、スカウトマンといつよりはサラリーマンといった方がいいような男だった。

仕事の賜物か、あるいは別の理由からか、くだけたスーツとよれたネクタイのせいで敏腕という印象はまったく受けない。

ただし、容姿はそれなりのものだった。三十三という年齢（本人が勝手に喋った）よりも大分若く見える顔立ちを、銀縁のシャープな眼鏡が飾っていた。童顔のせいか、くせつ毛の黒髪も愛嬌に見える。

もつと服装に気を使えば、案外モデルでもやつていけるんじゃないか？　と一夜は思つた。まったくもつて一夜には関係ないことだつたが。

コトリ、と音がなつた。

その音に一夜ははつとなる。少々ぼんやりしそぎていたよつだ。音源は、八雲がテーブルに置いた湯飲みだつた。

「さて、と。詳しい話はお母様がお戻りになつてから、と思つてい

たのですが……お戻りになりませんねえ？」「

困ったように軽く髪をかくハ雲。

確かにそうだな、と一夜も無言で同意した。静の帰りが随分と遅い。彼女が買い物に行つたスーパーはここからそう遠くない。常ならば、もつと早く帰つてくるはずだ。どうせ近所のおばさんにも会つたのだろう、と一夜は適当に当たりをつけながら、

「あー、もしかしたらまだ結構かかるかもしません。知り合いで会つてたら話し込んでると思うんで」

「ふむ……。そういうことでしたら、先に一夜君にお話したほうがいいかもしれませんねえ。いつまでもこのままというのも、あなたが気まずいでしょうし。かくいう私も、あんまり初対面の人と二人きり、というのも気まずいですし」

(それはスカウトマンとしてどうなんだ？)

とは思つたが、場を和ませるための冗談かもしれないのに黙つておく。

「冗談だとしたら欠片も和めでない、といふことも含めて、ハ雲はその態度をどう受け取つたのか、一度頷いて、

「そうですねえ……。とりあえずは、先ほどお尋ねしたことを、もう一度訊き直しましょうかねえ。ほら、私ってそういう演出も大事にするタイプですから。核心部分から話し始めるつて、かつこいいと思いませんか？」

あなたの持論はどうでもいいから早く話せと思いながらも、一夜

は「はあ」と曖昧に頷く。

八雲はかすかに笑い、「では失礼して」と前置きしてから、

「　高瀬一夜君。あなた、天樹学園にスカウトされる気はありますか？」

天樹学園。

初等部から高等部までを一挙に擁する、いわゆるエスカレーター式の学園であり、また広大な敷地や桁違いの設備などでも知られている。

が、それらに反して生徒数は全体で千五百人前後と、かなり少ない。もっとも、当然のことながらそこには『ある理由』が存在しているのだが。

そしてその『ある理由』から、この学園は一つの顔を持つていた。

日本の未来を担う学園、といつ顔を。

加えて言えば、この顔によって、天樹学園は日本で知らぬ者なき超有名校として名を轟かしていた。

それも単純な、国民のヒーロー校に対する羨望としてではない。

政府やメディアでさえも、そういう見方をしている。政治家を志す者たちが、選挙で天樹学園への支援をマニフェクチュアの一つとすることは珍しくないし、適当にテレビのチャンネルを回せば、天樹学園に関するニュースが大抵一日に一つはやっている。

では、なぜ天樹学園がこれほど国の注目を集めているのか？それは謎でもなんでもない、答えは実に単純明快だ。誰かに聞けば、すぐにこう言つてくれるだろう。

それは謎でもなんでもない、答えは実に単純明快だ。誰かに聞けば、すぐにこう言つてくれるだろう。

曰く。

天樹学園には、
日本の未来を担う学園には、
『天才』が集つてゐる。

「よつは堀場なんですよ、天才たちの。日本中から天才や神童と呼ばれる少年少女を、我が学園は発掘・育成しているわけでしてねえ。それも、学問、芸術、武術、またはそれらに当てはまらずとも、私たちはとにかく突出した才能をかき集めているんですよ。才能ある若者は、文字通り國の宝、未来ですからねえ。天樹学園があれほどまでに期待を背負つてゐるのも、私が言つのもなんですが、納得できますよ」

あなたは？ という質問の形で、八雲は長口上を終えた。
自分でも芸がないとは思つがまた「はあ」と曖昧に同意して、一夜は考えを巡らせる。

（そんなこと、今更言われるまでもねえ。今の世の中じゃ、天樹学園がどんな学校かなんて、常識レベルで知られてる。もちろん、俺だつて。……だから、知りたいのは ）

持参した『一般には出回らない』パンフレットを卓上に広げて、ちらほらと施設説明を始める『天樹学園のスカウトマン』に視線を向けつつ、まだ肝心な部分が聞けていないことに眉をひそめる。

（……こつちから聞いてみるか）

向こうから言い出さないのなら、こちらから促せばいい。
だから一夜は思い切って、『当たり前』の疑問をぶつけた。

「何で俺を？」

「ここから辺の園芸は、私が趣味で担当してましてねえ。初めはただの代理だったんですが、思いのほかこれが楽しくて。今ではかなりはまつて ハイ？」

どう考へても個人的な話に移行しつつあつた八雲は、突然の質問に首をかしげた。

一夜は、繰り返す。

「『何で、俺を』？」

「……何で、といいましてもねえ。それが私の仕事なものですから」

違う。

そうじやない。

訊きたいのは、そんなことじやない。

「あんたが本当に天樹学園のスカウトなら、当然俺のことを調べてるんですね？ だつたら、おかしなことがある」

「と、いいますと？」

簡単だ、と置いてから、

「『俺には何一つ才能なんてない』。天才ばかりが在籍している学校に、俺なんかが誘われるわけがないんだ」

そう。

そこが、一番の疑問点だつた。

高瀬一夜は、自他ともに認める凡人である。

ハ雲が言つた『突出した才能』なんて、一つたりとも持つてはない。

勉強、スポーツ、美術、音楽、武道。何をしたとしても、人並みのことしかできない。それ以上に、どうやっても届かない。自分は、天才なんかじゃない。どこまでも、ただの普通の人間だつた。だとうのに。

よりもよつて、そんな自分にかかつた『スカウト』という千載一遇のチャンス。入学＝将来を約束されたとさえ言われる学校からの、それは確かに間違えようのない勧誘だつた。

しかし、一夜だつて自分のことはよくわかっている。
だからこそ、「はいそうですか」と、このチャンスを気楽に受け入れることはできなかつた。

そしてそんな一夜の心情を知つてか知らずか、ハ雲は指を組みながら、一夜の問いかけに返答し始めた。

「確かに……こういつては失礼なのですが、あなたはどう転んでも、天才の類ではありません。凡夫、としか言いようがないわけです」

「…………」

少し、力チンときた。

自覚はあるとはいえ、他人から改めて告げられて、気持ちのいいはずがない。

だから一夜は渋面を作つたのだが、

「しかし、それでいいのですよ」

「え？」

続く奇妙な逆接に、一夜は思わず目を見開いた。

そして、

八雲断は、

その反応をこよ待つていたかのように、柔軟な笑みを作った。

「『それこそが』あなたの才能なのですから」

そつと、一言を付け加えて。

これが、一ヶ月前の話。

* * *

この約一ヶ月後。
五月一日に、

天才と凡才の物語は、幕を開ける。

第一話 始まりを告げる男（後書き）

「意見・感想、お待ちしています。」

第一話 天樹学園（前書き）

なんといいますか、今回もあんまり話が進んでいません。この作品はなるべくじっくり作っていきたいので。というか、未だに生徒が出てこないって……。

お気に入り登録や、感想をくれた方がいらっしゃいました。これらも読んでくれる方がいるように、がんばりたいと思います。

第一話 天樹学園

五月一日。

今だ春の穏やかな陽気が残る、朝。

広大な敷地面積を誇るがゆえに、いくつかの出入口を設置せざるを得なかつた天樹学園、その『出入口』の一つ。ちょうど西に位置する『第一ゲート』の前に今、一台の黒塗りの外車が停車した。

瞬間、それを見計らつたように（実際そうなのだが）声が響く。

『IDの提示をお願いします』

それは、車の正面にある鋼鉄の扉から聞こえてきた。おそらくはどこかにスピーカーがあるのだろうが、一見しただけでは発見できない。

運転手の男は指示に従い、ステッカから一枚のカードを取り出し、フロントガラスごしに門壁 正確には、そこに埋め込まれた高性能小型カメラ に、それをかざした。

数秒の間があつてピーッという電子音が鳴り響き、機械仕掛けの門は両開きの要領で、徐々に中心線から左右に隙間を広げていった。丁度、車体が通れる幅まで。

『IDを確認しました。『運搬者』・鎧木。お通りください』

ドレンツ、とエンジンがうなりを上げ、マフラーから排気ガスが漏れ始める。

わずか間を置いて、タイヤが砂利を噛む音が聞こえてきた。車はゆるやかに発進し、ゲートの内側へと 天樹学園の敷地内へと

車体を滑らせていった。

『第一ゲート』を通り抜けると、コンクリートで舗装された一本道が始まり、両脇にはわざわざ一から植林して作られた人工林が広がっていた。

車内からでは立ち並ぶ木々しか見て取れないが、その奥に分け入れば、これまた人工的に作られた湖や、数十種類の生物たちを確認できる。

もちろん、一般的な学校であれば、敷地内にこんなものを用意する必要性はない（というかそもそもそんな面積はない）だろうが、生憎と天樹学園ではいくつかの使い道がある。

一例を挙げるならば。

たとえば、学園には芸術系の才能としては一般的な、『絵画の天才』が何人か所属している。当然のことながら、彼らに用意された美術室ではモチーフに困らない。だが、どうしてもそのほとんどが人工物になってしまう。

そこで、この人工林の出番となる。百パーセントの大自然というわけではないが、それでも学園にこもっているよりはよほど自然的な絵が描ける。とりわけ、風景画を得意とする『天才児』にとっては、それはこの学園に在籍する一つの大きな理由にもなっていた

「うへえ。機械仕掛けの校門に、今度は大自然かよ。さすがは噂の天樹学園、型破りなことこの上ねえな。金持ちってのはこれだから嫌だね」

のだが、そんな事情をしらない高瀬一夜の日には、ただの道楽としか映らなかつた。

車を走らせている運転手　　鎧木裕也は小声の皮肉に反応し、ルームミラーで、後部座席に座り窓の外を眺めている。一夜をちらりと見て、

「言つなよ、少年。型破りつてのは俺も同意するが、別にお遊びでこんな大層なものこしらえたわけじゃないさ。」^{かぶ}見えて、ちゃんと理由の一一つはある

「ふーん」

「「」のガキ……まったく信じてないだろ?」

いかにも興味ありませんよとでもいいたげな口調に、鎧木はわざか口を歪めた。

(おつと、イカン。もっと冷静さを保てよ、俺)

自分を落ち着かせるためにいつもあるよう、一度無精ひげを撫でてから、とりあえずは間違いを正すことから始める。

「さつき君はあの『ゲート』を校門と言つたが、それは違う

「え? やうなんですか?」

「ああ。あれは単純に学外と学内を隔てているだけさ。そもそも、いちいちHD認証してから開け閉めしているような校門なんて、君だつて嫌だろ?」

それはまあ確かに、と頷きながら、一夜は鎧木に尋ねた。

「じゃあ、本物の校門は？」

先ほど鏑木がそうしたよつこ、ルームミラーで気安い運転手の顔を見ると、彼はいたずらっ子のように笑っていた。
その意味を考えるよりも早く、

「すぐにわかるぞ」

鏑木は、そう答えた。

そして、
まるでそれに合わせたかのように、
車が人工林の狭間を抜けた。

そこに、世に名を馳せる、天才たちの学び舎　天樹学園が見えた。

『第一ゲート』は学園正面のルートに建設されているため、真っ直ぐに進めば、そのまま天樹学園を真正面から視界に収めることができる。

鏑木が「すぐにわかる」と言つたとおり、レンガの塀と鉄門で構成された校門も見えていた。

「あれが、天樹学園……」

思わず身を乗り出し、運転席と助手席の間から、眼前にそびえる建築物を見据える。

それは、イメージとは違い、極端に豪奢といった造りではなかつたが、それでも一般の高校と比べるべくもなく、デザイン性に富んだ様相をしていた。

見える限りでは四階建て、大まかな形としては凸形のシンメトリ

一構造。そしてその凸の尖つた部分には、大きく天樹学園の校章
大樹と鳥が合わさつた意匠 が描かれている。

一夜には様式など詳しいことこそわからなかつたが、以前在籍していた『建築の天才』の発案で今の形に改装されたということは聞いていた。正直建築の良し悪しの知識など持ち合はせていないが、それでも一夜は目を引かれ、わずかながらにせよ天賦の才を感じ取つた。

予想通りの反応に満足したのか、鏑木は声にわずかに喜色を混ぜ、

「正確に言えば、『あれも』天樹学園だ。あの校舎がメインには間違いないが、周りにも目を向けてみな」

鏑木のアドバイスに従つて、一夜は視線をせわしなく動かす。

一番初めに飛び込んできた校舎に意識がいついていたが、言われてみればそこかしこに何かしらの建物が建つていて。大小さまざまな建物が立ち並ぶ様は、さながら小規模な街のようにも見える。中には時計塔らしきものもあって、一夜は目を見張つた。

「すげえ……。もしかして、これ全部が？」

鏑木が、一夜の質問を違わず受け取り、頷く。

「そう。周辺にある建物も、もつと言えばこの敷地も全てが天樹学園だ。体育館や室内プールなんてのは言うに及ばず、学生たちが使う研究棟や巨大図書館などなど。およそ全ての『才能』を満足させられるように、付属施設としてあれらは建設されたんだ」

「あれでただの付属なんですか。中には、普通の校舎レベルの大きさもあるけど」

「君がわざと言つたとおりや。文字通り『型破り』なんだよ、この学園は。……つと、それよりも、もうじき着くぞ。準備しな」

「はい」

短く返事して、一夜は隣の席に置いたリュックを手に取る。中には筆記用具など簡単な物しか入っていなかつた。なにしろ、まだ教科書のひとつも貰つてないのだから。

それから一夜は今自分が纏つてゐる紺色のブレザー 天樹学園の制服のネクタイを軽く引っ張つた。
そこまでして、やつと一夜には自覚が芽生えてきた。

(夢じやない)

これは間違えようもない、現実だといつ自覚が。

(俺は、今日から天樹学園の生徒だ)

憧れ高き学園の一員になつたのだといつ自覚が。

「……よしつ」

だから一夜は氣合を入れるように声を出し、
そして車が、校門前で停止した。

ガチャリ、と右側のドアがひとりでに開き（タクシーと同じくエンジンの吸気負圧を利用しているのだろう）、鎧木がこちらを振り返つて、

「さあ、到着だ少年。歓迎の言葉はもつと適任がいるから言わないが、君の才能が未来に羽ばたくことを祈つておこう」

才能、といつていろに少し反応しつつも、一夜は礼を言い、外に出る。

車外に降り立つた足が、久しぶりの地面の感触を確かめた。再び、バタンとしまるドア。一夜はその音に押されるように、歩き始める。

(そんじゃま、一丁行ってみようか…)

そしてそのまま、一夜が来ることが伝わっていたのか開きっぱなしになつていた校門をくぐり、天才たちがひしめく天樹学園へと、足を踏み入れた。

これから未来に、思いを馳せて。

* * *

あらかじめ受け取つた校内案内図に従い、一夜は昇降口ではなく、来客用（といつても来客など滅多にないが）の玄関から校内に入つた。

そのすぐのところ、「応接室」とプレートが出てゐる部屋の前まで歩き、扉をノックする。
間髪をいれず、返事が来た。

『どういへ』

その声が聞き覚えがあることに少し驚きつつも、一夜はノブを回

した。

「失礼します」

言いながら、奥へと力を込める。扉は何の抵抗もなく開き、隔たりを消した。

一步踏み入ったところで、一夜は室内にいた人物に迎えられた。

「どうも、お久しぶりです、一夜君。一ヶ月ぶり、ということになりますかねえ？」

「どうも」

一礼して、その人物を一夜は見る。

くたびれたスーツ、銀縁眼鏡、黒のくせつ毛。これらのパーティを持つ人間を、一夜は今のところ一人しか知らなかつた。その名を、口に出す。

「八雲さん、でしたよね？」

「ええ。合っていますよ」

にこり、と笑つて八雲断は肯定した。
否定して、一夜に着席を促す。

一夜は素直に従い、低いテーブルを挟んで向かい合わせたソファの一つに座る。反対側には、もとより八雲が座つている。奇しくも一ヶ月前と同じ構図になつたな、と詮無い考えを頭の片隅に押しやりながら、一夜は口を開いた。

「スカウトマン、じゃなかつたんですか？」

言外に、なぜお前なのか、という意味を込めていた。

普通こういうのは、校長なり担任なりが当たるものではないのか。少なくとも、スカウトマンが出てくるなどとは予想の外にあった。

「そうですねえ。誤解なきよつて、私、スカウトマン』ではない』んですねえ』

「えつ?」

前提が崩れたことに、一夜は驚いた。
八雲が慌ててフォローに入る。

「ああ、申し訳ありません。そう言つてしまふと、あなたを騙したみたいになっちゃいますよねえ。そういうやなくて、この前の単なる代理だった、というだけの話ですよ」

「代理?」

「ええ。本当にあなたを迎えて行くはずだつたスカウトマンに、ちよつとした小用ができてしまいましてねえ。そこで急遽、手が空いていた私にお鉢が回つてきた、とまあつまりはこうしたことでしてねえ。とはいへ、私も本職は違いますから、手続きに一ヶ月もかかつてしましましたが。お恥ずかしい限りです」

そう。

今は、五月。八雲からスカウトを受けてから、すでに一ヶ月が経つていた。

あの日、「転入の目処が立ち次第、『連絡いたします』と一夜(と帰宅した母)に告げ、八雲は高瀬家を去つていった。それから何

の音沙汰もなかつたのだが、つい先日やつと転入日決定の報が飛び込んできたのだった。

その空白の一ヶ月に、天樹学園の裏側で何があつたのかは、わからない。言葉通り手続きに時間がかかつただけかもしないし、そうではないかもしれない。ただ、現実問題として、一夜がここに通えるようになつたのは確かだつた。

と、そんなことをつらつらと考えていると、八雲がやおら立ち上がり、

「さて……では、一夜君。あまり口ひで話すのもなんですから、そろそろ出発しましようか」

「出発？」

怪訝に思いながらも、とりあえず相手に会わせて立ち上がる。八雲は「ええ」と首肯して、

「あなたの、教室にですよ。これから三年間、あなたが過ごす、教室です」

後ろ手を組み、八雲は扉へと歩を進める。

一夜が閉めた扉をゆっくりと開け放ち、彼は案内人のよつに右手で外を示した。

そして、

「よつゝや、一夜君。我らが天樹学園へ」

相変わらず口元に微笑を湛えながら、歓迎の意を告げた。
なぜか、

一夜は、その微笑から目が離せなかつた。

天樹学園の校舎は、一般には知られていないが、実は一種類存在している。

一つは、先ほどまで一夜がいた応接室も含んだ、通称『西棟』。またの名を『一般校舎^{メジャー・クラス}』とも呼ばれるそこは、『表』の校舎の役割を担っている。あつさり言つてしまえば、世間が持つていて『天樹学園に対するイメージ』はこの西棟が元になつていてるのだ。

学問系の天才、運動系の天才、芸術系の天才、技術系の天才、エトセトラエトセトラ……。少し言い方はおかしくなるが、およそ『一般的な天才』たちが所属しているのが、その原因である。認知度が高く、卒業後に広く名が広まることになる、いわば『ありふれた分野の才能』を持つ者たちは、全て西棟に集まつているのだ。

そして、もう一つ。

『西棟』と対をなす通称『東棟』。

またの名を『特別校舎^{マイナー・クラス}』。『裏』の校舎の役割を担つていて、天

樹学園のブラックボックスである。

こちらの校舎に所属している生徒は、西棟とはまったく異なる基準で選ばれている。

卒業後もほとんどの人間に知られないような、危険性や特異性が高い、知られざる天才たち。オンリーワンの才能も多い、いわゆる、ぶつとんだ連中の巣窟なのだ。

だからこそ、イメージ戦略に使われようはずもないし、表舞台に立つことも皆無なのだった。

「とはいえる、知られていないというだけで、本当は世間で活躍したりもしてるんですけどねえ。まあ、世間はイメージ先行というか、あまり受け入れられない天才たちも大勢いるんですよ。だからこそ、幼いうちからその才能を保護し、社会に送り出せるように私たちが

いるわけなんですが「

なるほど」と頷きながら一夜は先導するハ雲について行く。

一夜たちはすでに西棟を出ていた。今は、一度西棟の裏手に回り、そこから赤レンガの道を真っ直ぐに進んでいるところだ。

遠く、というほどではないが、いくらか距離がある先に見えるのは、西棟とはまた違った趣をした校舎、件の東棟である。

西棟と直線上に建てられているそれは、まずもって、サイズが一回り小さかった。横幅は言わずもがな、高さも二階になつていて。もつとも、東棟の選別基準に希少性も含まれることを考えれば、自明の理ではあつたが。

(希少性が条件の一つのこととは、それだけ総生徒数は少なくなるはずだしな)

と、一夜は適当に推測してみる。

まあ、それはそれとして。

「それで、何で俺はその『マイナー・クラス特別校舎』とやらに所属することになるんですか?」

道すがら、一夜は問うた。

といつてもなんどなくは予想がついている質問だったが、一応答えは聞いておくべきだと思つたからだ。

案の定、返答は想像通りだつた。

「もちろん、君の才能が『マイナー・クラス特別校舎』の在籍条件にひつかつたからですよ。危険性、特異性、希少性……どれが対象になつたのかは、あなたが一番わかっているでしょうが。私が一ヶ月前にあなたに言ったこと、覚えてます?」

「俺の、才能の話ですか？」

内心では、本当に『そつ』なのか疑わしい自らの才能に疑惑を抱きつつも、一夜は返した。

「ええ、その通りです。　ああ、それと、これからは自分の才覚を『才能』と呼び習わしてもらいますので、そのつもりで」

「ギフト?」

「はい。特別、決まりというわけではないんですけどねえ。ここではほとんどの生徒がそう呼称しています。なんでも、元々は十数代前の生徒会長　皇さんすめひなと言う方なのですが　が発祥らしいのですが。確かに、『私たちの才は、神からの贈り物である。故に、私は自らの天分を「才能」と称す』……でしたか」

「…………」

今度は返さず、一夜は無言でハ雲の後ろに続く。

(『『才能』、か。もし本当に神様からのプレゼントだつていうなら、笑えるな。なんだつてこんなヘンテコな才能を俺にくれたんだか)

脳裏に浮かぶのは、四月初めに聞いた台詞。

『「それこそが」あなたの才能なのですから』

それを最初耳にしたとき、一夜にはよく意味がわからなかつた。

だが、その後に続く話を聞いて、次第にビビりうことなのかを飲み込んでいった。

かなり、微妙な話ではあったが。

(微妙でもなんでも、『これ』のおかげでここに来れたんだ。文句も言つてられねえか)

知らず、拳に力が入る。

今更この学園を退学になるわけにはいかない。すでに担任が持ち込んだ私立高校の話は蹴っている。ここで退学にでもなるうものなら、最終学歴が中卒ということになってしまふ。正直、それは避けたい。もう一つ、俗な理由もあることだし。

と、思う間に、気づけば前を行く八雲が立ち止まっていた。つられて一夜も止まり、八雲の向こう側に田に向ける。

そう、

天樹学園のブラックボックス、『特別校舎^{マイナー・クラス}』に。

八雲が、正面入口へと至る階段を昇り、運動場のトラックを半分に割ったような形の木製扉(ご丁寧に紋様が彫られていた)の元までたどり着く。

今は観音開きに開かれているその大扉は、横幅がかなり広い。毎朝多くの生徒を迎えることを想定された造りだつた。

一夜は、これどうやって閉めるんだ? などと疑問を思い浮かべたが、その思考をさえぎるかのように、声がかかつた。

「行きましょうか」

「はい」

八雲が言い、一夜が答える。

ほどなく一人の姿は、校舎の中へと消えていった。

第一話 天樹学園（後書き）

「意見・「感想・質問など、お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5615z/>

NORMALIZE

2011年12月26日21時57分発行